MARUKEI

# Brand Book

# いい場所は、
# いい人たちがつくる。

いい家、いいお店、いい建物ってなんだろう。

それは、あなたがずっと愛せる場所。

そんな場所をつくるために、あなたとあなたの街の声を聞き

品質に誇りを持って、今日も愛を届けています。

# いつまでも、
# ここがわが家。

家族が住む家をつくり、「家族の幸せ」をつくるのがわたしたちの仕事です。

でも、「幸せ」は時の流れとともに移ろい、そのかたちを変えていきます。

子どもたちが巣立った後も、幸せの残り香を感じつつ

残った人たちの、その時の幸せに寄り添える家。

人生を通じて、「わが家」で居続けてくれる住まい。

それを考え、つくることが、MARUKEIの家のかたちです。

# 地域に、
# もっと愛を。

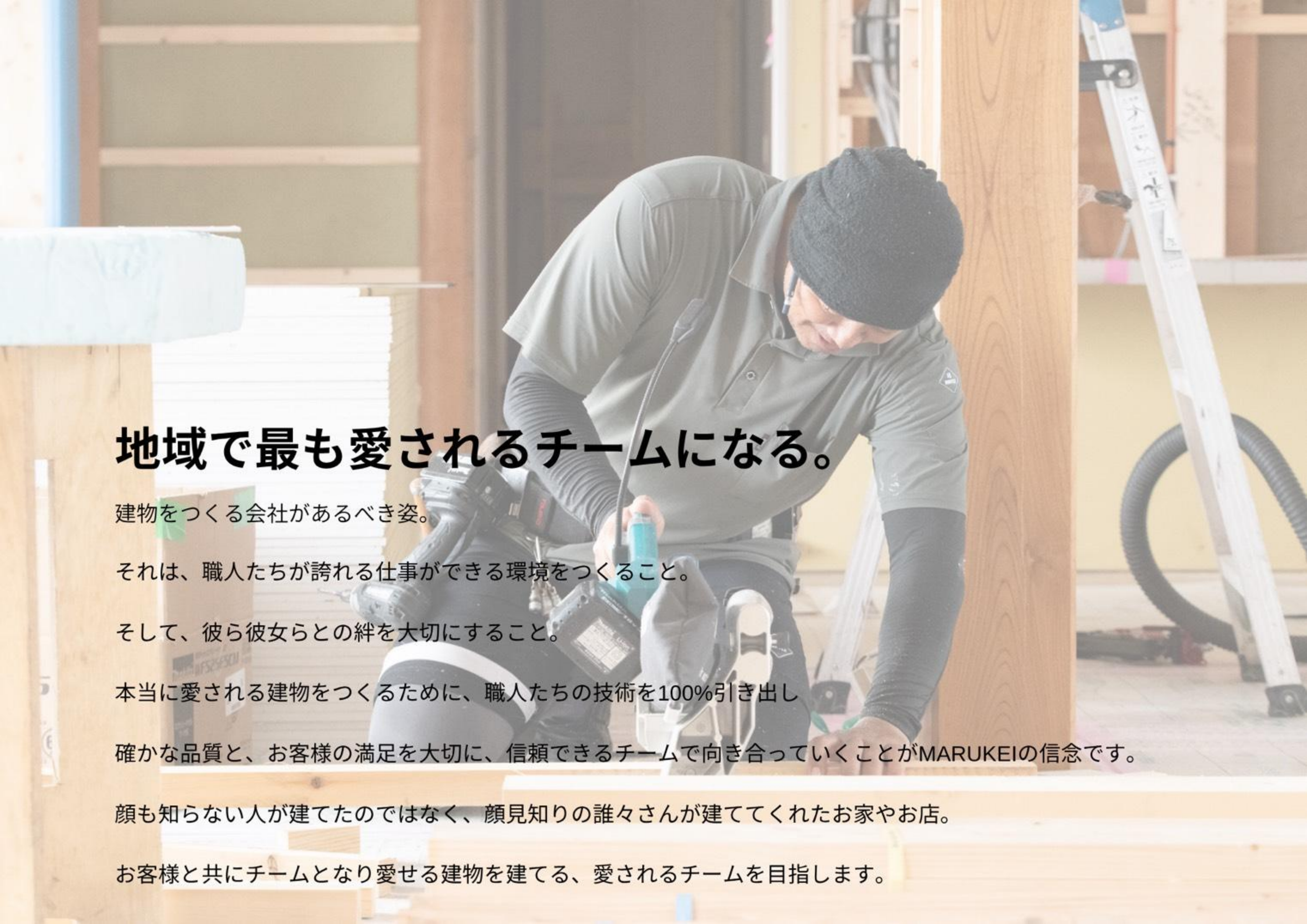
MARUKEIが存在する理由。

それはスタッフ、職人たちだけでなく

連なる地域の人たちすべてを繋ぎ、新しい出会いや関わり合いの連鎖を生んでいきたいから。

地域がひとつのチームになり、今よりちょっとだけ楽しい生活になるように

MARUKEIが地域の架け橋として、未来を描いていきます。



# 地域で最も愛されるチームになる。

建物をつくる会社があるべき姿。

それは、職人たちが誇れる仕事ができる環境をつくること。

そして、彼ら彼女らとの絆を大切にすること。

本当に愛される建物をつくるために、職人たちの技術を100%引き出し

確かな品質と、お客様の満足を大切に、信頼できるチームで向き合っていくことがMARUKEIの信念です。

顔も知らない人が建てたのではなく、顔見知りの誰々さんが建ててくれたお家やお店。

お客様と共にチームとなり愛せる建物を建てる、愛されるチームを目指します。

# MARUKEIの届ける心

## 人を重んじる

社会は人でできている。
会社も人であり、お客様も人。
人を大切にし、他者を尊重することを
大切にする。

## やりきるに拘る

もう少しできると思うのなら
もう少しを惜しまない。
やり切った先に品質が生まれる。
品質の先に信頼と自信が生まれる。

## あの人の笑顔のために

自分が行動したり考えたりする時は
「知らない誰か」ではなく
「あの人」の顔を思い浮かべることで
本当の意味でその人のためになる。

## ウェルカムの心

常に新しい物や人、考えを拒まない。
中に入れて初めて判断する。
もし合わなかったとしても、それは
新しい発見と成長に繋がる。

# お客様に届けるモノ

理解

いい家への正しい認識

愛着

物語のある家

MARUKEI

安心

人柄と品質への信頼

未来

サポート&コミュニケーション

# 創業者の物語 MARUKEI ―受け継がれた賑わい―

夕暮れ時の庭に、もうもうと立ち上る白い煙。炭火の上でじゅうじゅうと音を立てる肉の香ばしい匂いと、どこか誇らしげな大人たちのダミ声が、幼い僕の五感を満たしていた。

「おい、もっと食えよ！」「棟梁、こっちの酒が足りねえや！」

建築の仕事をしていた親父の周りには、いつも大勢の職人や地域の人々が集まっていた。ことあるごとに開催されるバーベキューや、冬の澄んだ空気に響く餅つきの小気味よい音。弾けるような笑顔と、地響きのような笑い声。子どもながらに、僕はその光景が大好きだった。親父がつくる「現場」には、いつも温かい血が通っていた。あの賑やかで誇り高き光景は、何年経っても僕の心の真ん中に鮮明に焼き付いている。

――それから長い月日が流れ、僕もまた、導かれるように親父と同じ建築の世界へと足を踏み入れていた。

しかし、現実の現場は、僕の記憶にあるものとはあまりにもかけ離れていた。

「おい、さっさと手を動かせ！ 代わりなんていくらでもいるんだよ！」

怒号が飛び交う殺伐とした空間。僕が勤めた会社は、家という「作品」を作るのではなく、ただ効率よく「数」をこなすことだけを追い求める場所だった。現場を支える職人たちへのリスペクトなど微塵もない。ピリピリとした最悪の空気感の中、すり減っていく職人たちの背中を見るたび、胸の奥がキリキリと痛んだ。

（こんなのは、僕の知っている建築じゃない）

違和感を抱えたまま、気づけば17年の歳月が流れていた。十分すぎるほど泥をすすり、経験も積んだ。だからこそ、もう限界だった。

「職人さんが、自分の仕事に誇りを持てる現場を取り戻したい」

その一念だけが、僕の背中を押した。これまでお世話になったチームのみんなに、今度こそ恩返しがしたい。泥臭く泥にまみれながら、一緒に汗を流してくれた仲間たちに、最高の舞台を用意したい。

それだけの熱量と、一歩を踏み出す覚悟だけで、大工道具を詰め込んだ車のように走り出したのが「MARUKEI」という会社だった。
独立してからの日々は、決して平坦ではなかったけれど、視界は驚くほどクリアだった。

MARUKEIの現場には、あの頃の親父の庭のような笑い声が満ちている。僕にとって「チーム」とは、単に契約を交わしたビジネスパートナーではない。独立してから手を貸してくれた人たちも、これから出会う未来の仲間たちも、全員が同じ船に乗るひとつの家族、ひとつの「チーム」だ。

「ちょっとうるさいくらい、あいつは現場に首を突っ込んでくる」 職人たちに、陰でそんな風に笑われているかもしれない。

それでも構わない。これからも僕は、自分に関わるすべての人たちに、僕が持てる最大限の愛を、全力で届け続けるつもりだ。

たとえそれが、時代遅れの「おせっかい」だと笑われたとしても。
MARUKEIはあの日の温もりを胸に、今日も大切な仲間たちと、一歩一歩泥臭く走り続ける。

—— ずっと愛せる場所をつくろう。

敬